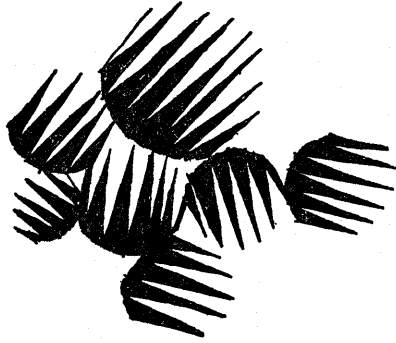


近代短歌に現われた子ども

(七)



大塚
雅彦

(13) 齋藤茂吉

昨年（昭和五十七年）は齋藤茂吉生誕百年ということ、茂吉の生誕地の山形県上山市かみのやまを始め各地で記念講演会や齋藤茂吉展（例えば東京では小田急デパートで）等の催しが行われた。近代歌人の中では恐らく茂吉は最も愛され親しまれる存在である。例えば高校の教科書に採用されている短歌の数で、茂吉のそれは近代歌人の誰よりも多いのではあるまいか。

彼は明治十五年、山形県南村山郡金瓶村かみびん（現上市）の農家守谷家の三男として生まれた。私は数年前此処を訪れて、守谷家の当主であった広吉（茂吉の長兄）の令息夫人に逢ったことが

あるが、いかにも素朴なおばあさんという感じであった。茂吉もまた、小学校を卒え上京して、親戚の斎藤紀一家の養子となり、東大医学部を卒業し、紀一の次女である子と結婚し、養父の建てた青山脳病院の院長となり、欧州留学をし、精神科医を本職とした近代人であったが、死ぬまで、東北農家の子としての農民性や素朴さを失わなかった人として知られている。

短歌は、旧制一高生のときに、正岡子規の『竹の里歌』を読んで作歌に志したというが、伊藤左千夫門に入り、「馬酔木」を経て「アララギ」の幹部、中心的存在として活躍し、疎開先の郷里から帰って昭和二十八年二月、東京の自宅で没するまで、生涯にわたって作歌し、合計十七冊の歌集をのこした。そのほか柿本人麻呂や源實朝あるいは近代短歌史や近代歌人たち等に関する研究、その持論とした写生説に関する理論、滋味溢れる隨筆など、多くの著作を世におくり、その膨大な全業績は斎藤茂吉全集全五十六卷（昭和27〜32。なお、第二次全集も昭和48より刊行され、この方は全三十六卷）として

のこされている。茂吉に関する研究もこんにちさくさく進んでおり、伝記研究では柴生田稔、本林勝夫、藤岡武雄の諸氏を始めとする研究家によって次第に茂吉の生涯が明らかにされ、また、作品の研究、解説、鑑賞や、茂吉が一応完成した短歌写生説の理論的解明等も進められている（私自身も茂吉研究の様相をまとめて展望したことがある。拙稿「茂吉研究史付文献目録」——国文学解釈と鑑賞」昭和44年4月特大号（斎藤茂吉Ⅱ人・生活・文学特集号）所収）。

- ①平凡に堪へがたき性の童幼ども花火に飽きてみな去りにけり
 - ②くれなるの獅子をかうべにもつ童子もんどり打ちてあはれなるかも
 - ③押し入にひそむこの子よ父われのわるきところのみ伝はりけらし
 - ④あはれあはれ電のごとくにひらめきてわが子等すらをにくむことあり
- ①は明治四十二年作で、処女歌集『赤光』（大正2刊）

所収。「細り身」と題する一連の中にある。この歌の前に「病みて臥すわが枕べに弟妹らがこより花火をして呉れにけり」「わらは等は汝兄の面のひげ振りのをかしながらいひ花火して居り」等があるのをみると、作者が病臥している枕辺に、童である弟妹たちが慰めに来て、「兄さんのひげが伸びておかしいな」などとさざめきながら、こより花火（紙をこよって作った線香花火）をしてくれていたのであろう。明治四十二年といえは茂吉は既に二八才であったが、この養家の弟妹は幼なかつたのである。ところがその弟妹たちが、単調な遊びにがまん出来ないうらしく、いつの間にか、みんなどこかへ行ってしまった、という歌である。子どもというものは元気なもので、瞬時たりともじっとしていない。私は亡母から「子どもがじっとして動かない時は病気かもしれないから、気をつけなさい」と育児上の注意をよく言われた思い出がある。茂吉のこの歌はそんな子どもの生感、本質を実に的確にとらえていて、私はいつもこの歌を読む毎に感心させられる。なお茂吉にはこの「童幼」という語

の他に、「釋兒」「釋童子」「釋き子」「釋ら」などの特殊な用語を用いた作品が何首かある。

②は大正三年作で、歌集『あらたま』所収。「冬日」と題する一連の中にある。角兵衛獅子を素材にした珍しい作品なので、抄出した。この歌の前に「ふゆ空に虹の立つこそやさしけれ角兵衛童子坂のぼりつつ」という作もあるし、『赤光』の中にも「角兵衛のをさな童のをさなさに足をとどめて我は見んとす」「笛の音のとりほろろと鳴りひびき紅色の獅子あらはれにけり」「いとけなき額のうへにくれなるの獅子の頭を持つあはれさよ」等がある。角兵衛獅子というのは一名越後獅子ともいい、越後の蒲原郡から出て、子どもが紅の獅子頭をかぶり、鶏の尾をつけた衣服を着けて舞い、逆立などを演ずる旅芸であり、②の「もんどり打ちて」は「とんぼ返り」をすること、つまり逆立である。角兵衛獅子を見かけることは最近ではなくなったが、大仏次郎の作品『鞍馬天狗』に登場する重要な子役であり、未だ十三才の美空ひばりが唄ったところの「笛にうかれて逆立すれば、

山が見えますふるさとの、わたしや孤児^{みなしご}街道ぐらし、な
がれながれの越後獅子」という哀調を帯びた「越後獅子
の唄」（西条八十作詞、万城目正作曲）は、歌謡曲フ
ァンの私には忘れがたい。

③は昭和八年作で、歌集『白桃』所収。「新年」と題
する一連の中の歌である。この歌の前に「四^よたりの子そ
だてつつをれば四^よたりとも皆ちがふゆゑに楽しむわれ
は」という一首があり、四人の子（茂太・百子・宗吉・
昌子）を育てながらの父親としての感懐をうたったもの
のようである。そのうち③の「押入にひそむ」子は昭和
二年生まれの数え年七才であった次男宗吉（後の北杜
夫）を詠んだものだろう。なぜなら、北杜夫自身が後
に屢々、この押入れの中にひそんだ幼時の思い出を書いて
いるからである。正月早々に何かで叱られた幼児が、押
入れの中に入ったまま出て来ない、そうした行為に自分
の性格と似たものを感じてなげいている。「一面におい
て父と子の深い絆^{きずな}をいやおうなく認識させるものである
し、同時に微妙な愛情の表現にもつながるもの」で、

「子に対する一種自責の念が伴っている。作者はそうい
う屈折した形で父親としての愛情を吐露している」（本
林勝夫『斎藤茂吉』（昭38・5）わけだ。ちなみに、茂
吉自身も壁に囲まれたような居室を好み、紙帳（紙で作
った蚊帳）の中にもって執筆し、風を極端に嫌い、中
国山水画でも「幽邃でこもる感じのする」図柄を愛した
（本林、同書参照）という。まさに押入にこもる息子と
似ていたのである。

④も昭和八年作で、同じく『白桃』所収。「時々感想
断片集」一連中の歌である。親が子を憎むということは
本来あり得ない筈であるが、そのわが子をすら、一種の
電流の如く憎悪する心が一瞬ひらめき通ることがある。
その親の心理を剔抉^{てきげつ}した鋭い作品で、それゆえに「あは
れあはれ」という強い詠歎を伴うのである。茂吉自身
「へ電のごとく」の語も長くかかって造ったが、よく考へ
ると、仏典か中国の古い詩あたりにあるやうな気もして
ゐる」（『作歌四十年』）と述べている。茂吉門下の佐藤
佐太郎氏は「用例は仏典にも中国の詩にも多くあるが、

そのほとんどは人生の早く過ぎることの形容として使われている。このように瞬間の「ひらめき」の形容として、写実的に使われている例はあまりないように思われる」

(佐藤『茂吉秀歌』下巻、昭53・4)と述べている。

⑤青葉くらぎその下かげのあはれさは「女囚携帯乳児の墓」

⑥隣りにき居るをあからしめてごよながが父親はそれを聞

⑦わが孫の赤羅あからひくらむ頬もひてひとり寝る夜のともしびを消す

⑤は昭和十一年作で、歌集『暁紅』所収。「東海寺坐城」一連の中の歌である。自註によると「晩春の或日、牡丹を見がてら品川の東海寺を訪うた、……賀茂真淵の墓にまうで、ついでにその他の文人墓にも敬礼をした。その時ふと、繁った若葉に隠されるやうにして、この「女囚携帯乳児墓」といふのがあるのを見つけた。ある篤志の婦でもあらうか、悪因縁によって罪になった女囚に乳児がゐて、それが育たずに死んだのをあはれに思ひ、

菩提ぼだいを吊らふために建てた、いはば共同墓石なのである。……この墓石の「女囚携帯乳児」といふ文句が簡潔で哀深あわれいのでその儘取って用ゐた」とある。「このような事実の哀れ、文字の常識をこえた簡潔さに敏感に反応するのが、この作者の傾向であり、力量であった」と佐藤佐太郎氏は言うが(佐藤、前掲書、茂吉のヒューマンな傾向を示す一首だろう。短歌史の上で、女囚携帯乳児をうたった作者が今まで居たであろうか？ なお茂吉は「ドミニカ柿本スギ之墓行年九歳」をうたったたり(『つきかじも』)、「軍用動物慰霊之碑」をうたったたり(『つきかげ』)、この種のものに関心が深かった歌人と思われ、私はこのことに或る種の感銘をおぼえるのである。

⑥は昭和十八年作で、歌集『小園』所収。「山上漫吟」二十六首中の一首である。箱根強羅山莊じょうら在中の作。この「をとめご」は昭和四年生まれで当時女学校二、三年生であった次女昌子さんのようである。茂吉は昭和八年頃より同二十年まで、事実上妻てる子と別居生活のような状態が続いた(藤岡武雄『年譜・斎藤茂吉伝』新版、

昭57・3による)。そんなわけで、感じ易い時期を母と離れて生い立って来た子供たちに、ひとしお愛憐の情が深かったであろう。隣の部屋でしゃくりをしている娘、それを黙って聞いている父親である作者——一見何でもない内容をうたっているが、何ともいえない哀感が漂うのは「そういう父親の子に対するいとおしみと困惑とが、淡々としたよみ口の中にひそまっている」(本林勝夫、前掲書)からであり、また、「戦争末期に近い父子のすがたが、かなしく描かれている点にも注意してもいい」(佐藤佐太郎、前掲書)のである。

⑦は昭和二十二年作で、歌集『白き山』所収。「雀」という一連の中の一首。当時、茂吉は山形県の大石田に疎開中であった。前年の四月に初孫の茂一(茂太長男)が東京で生まれた。茂吉はそれをきき「孫茂一が生レ、ソレガ幸福デアツタ」と日記に書いて手放して喜び、「この春に生れいでたるわが孫よはしけやしはしけやし未だ見ねども」「はしけやし」は、いとしい、可愛いの意味」という歌を二十一年には作っている。孤独な疎

開地での日々の中で、未だ見ぬ愛孫を想像して、ひとり灯火を消して寝ようとする茂吉の姿が浮ぶ。「赤羅ひく」は肌や子にかかる枕詞だが、赤みを帯びてつややかに美しいという実景をも兼ねて用いられる。ここでは枕詞ではなく、嬰兒の頬の形容に用いられている」(上田三四二『現代秀歌I 斎藤茂吉』昭56・9)。「もひて」は「思ひて」である。私は本年(昭和五十七年)三月五日、小田急グランドギャラリーで「斎藤茂吉展」を見学した折、茂吉の或る葉書を見て感慨にふけた。

風にをどる鯉のほり二匹書きしハガキ孫祝ふ茂吉のこころをさなく

これはその折の拙詠である。

(14) 土屋文明

土屋文明は当年九十二才であるが、「アララギ」の総師^{すし}的立場でなお作歌を続けている。著名な現役歌人としては恐らく最年長であろう。その強靱な作歌力に驚かされ

る。彼は明治二十三年、群馬県群馬郡上郊村（現群馬町）保渡田の農家に生まれた。県立高崎中学在学中（私事にわたるが、私の同校先輩にあたる）に「アカネ」に投稿していたが、中学卒業と共に恩師村上成之の紹介で上京して伊藤左千夫の家に寄食し、その牛舎の労働に従うと共に、作歌の指導を受けた。一高を経て東大哲学科（心理学専攻）を卒業。信州へ行き教員生活を続けた後、上京。法政大、明治大等で教鞭をとった。その後、文筆人として現在に至っている。一貫して「アララギ」に属し、歌集は十一冊刊行している。万葉集や和歌史、歌人に関する研究、歌論書等の著述も多い。特に『万葉集私注』（昭24〜31）は名著であり、現在その第三回目刊行が進行中である。彼の歌風は「従来の短歌のリズムを無視するまでに詰屈（きつこつ）なりズムによって、社会化された生活者の内面を表出ししようとする」（講談社版『日本近代文学大事典』昭52、米田利昭執筆）もので、いわゆる「文明調」として知られる。

①おとろへて歩まぬ吾児を抱きあげ今ひらくらむ蓮の

花見す

②幼かりし吾によく似て泣き虫の吾が児の泣くは見るにいまいまし

③人よりも忍ぶをただに頼みとすわが生ぞざびし子と歩みつつ

④清き世をこひねがひつつひたすらなる処女等の中に今日はもの言ふ

①は大正十三年作で処女歌集『ふゆくさ』所収。「子を守る」一連の中にある。前の歌に「早つづく朝の曇り病める児を伴ひていづ鶏卵もとめに」とあるから、夏の暑さの中で児は身体を悪くしていた。その子を連れて出て、抱き上げて今開こうとする蓮の花を見せたという歌で、市民生治の中のひとときの父子像が描出されていて新鮮であり、父性愛も惨み出ている。ちなみに『ふゆくさ』には巻頭に「この三朝あさなあさなをよそほひし睡蓮の花今朝は開かず」の如く睡蓮の花をうたった佳作がある。

②は昭和五年作で、歌集『山谷集』所収。「月島」一

連の中にある。「じれじれて泣きやまぬ児をつれ出し心
おさへて大川わたる」という歌が続いている。何をぐず
っているのかピーピー泣く泣虫の子に腹を立てているも
の、それも小さい時のこの俺に似ているのだと思う
と、余計腹立たしくなるが仕方ない、という感情が、「い
まいまし」という思い切った表現で、端的に表出されて
いて、心をうつ。

③は昭和九年作で、やはり『山谷集』所収。「某日又某
日」一連の中の作。他人よりもただ、がまんすることを
頼りにして生きて来た半生を、子供と歩みながら寂しん
でいる歌である。文明には他にも「堪へしのび行く生を
子等に吾はねがふ妻の望のぞみは同じからざらむ」の如く、忍
耐克己の生活精神をうたった作が少なくない。彼の人生
観の一端でもあらうか。

④は昭和十年作、歌集『六月風』所収。「某日某学園
にて」一連の中にある。文明がどこかの学園（東京女子
大？）に講演に来た折の感懐であることが、前後の歌に
よってわかる。作者はかつて、諏訪高等女学校の教師をし

ていたことがある。その頃の生徒には、思想的に早く眼
覚めそれに身を投じようとした平林たい子や、捕えられ
て獄に死んだ伊藤千代子（東栄蔵『伊藤千代子の死』昭
54・10参照）のような直情の、すぐれた少女たちが居
た。今語っていると眼まなこをかがやかして私の講演に聞き入
っている処女らに、私はあの頃の生徒のことを胸痛いま
でに思い出す。ひたすら高い世、情潔な世の中を目指し
ていた清い処女たちよ——と文明は今、同じような処女
たちを前に涙ぐましい思いに駆られているのである。そ
して女子大教師である私自身もまた、文明のこの一連を
読む毎に、深い深い感動に心のうずくのを覚えずにはい
られない。

（お茶の水女子大学）